平成１５年度　8020 公募研究報告書抄録

研究課題：予防歯科施設における定期健診の長期間受診者の現在歯数の経年変化

研究者名：渋谷耕司[1)]、西川亮子[1)]、白澤幹子[1)]、石川正夫[1)]、笹井正思[2)]
所　属　：[1)](財)ライオン歯科衛生研究所、[2)]大阪大学歯学部付属病院歯科放射線科

厚生省は高齢社会への対応の一環として、平成元年に「8020 運動」をスローガンとして提唱した。その後、厚生科学研究報告で、8020 達成者が未達者に比べて全身の健康状態が良好であることから、口腔保健が健康寿命の延伸にその一端を担っていることが明かとなってきている。1971 年、(財) ライオン歯科衛生研究所は、大阪予防歯科ステーション（大阪市）を開設し、母子および成人を対象に歯と口の健康を主体とした予防歯科活動を行ってきた。そこで、今回、当ステーションにおける定期健診の有効性を検討するための基礎的情報を得る目的で長期間、定期健診を受診している成人の口腔状態を現在歯数を指標として検討した。

調査対象は、初診から定期健診の受診期間が 15 年以上、25 年未満であり、初診年齢が 20 歳以上の受診者 106 名(20 代が 20 名、30 代が 34 名、40 代が 35 名、50 代が 17 名、男性 69 名、女性 37 名)である。初診時の年齢から 20 代、30 代、40 代、50 代に分け、各年代の平均年齢、平均受診回数／年、平均受診期間、平均現在歯数を求めた。また、今回の対象者が受診期間中に行なわれた 5 回の厚生省の歯科疾患実態調査報告（1975 年、1981 年、1987 年、1993 年、1999 年）の現在歯数をもとに、各年代の初診時と最終受診時の現在歯数の推移を比較した。さらに、50 代について、上下左右の歯の寿命が 50 年前後の第 2 小臼歯を選び、健全歯と処置歯に分けた後、歯の寿命（生存時間）を生存分析した。

その結果、

1) 各年代における年間の平均受診回数は 1.4±0.6 回、平均の受診期間は、21.6±1.9 年であった。

2) 各年代の初診時の現在歯数は、20 代が 29.2 本、30 代が 29.2 本、40 代が 28.3 本、50 代が 27.5 本、平均現在歯数は 28.6±2.2 本であった。最終受診時の現在歯数は、初診時の年代で 20 代が 28.1 本、30 代が 27.0 本、40 代が 25.4 本、50 代が 24.4 本、平均現在歯数は 26.2±4.6 本であった。

3) 各年代における初診時と最終受診時の現在歯数の差は、年代が高くなるに従い差が大きくなる傾向が認められた。

4) 各年代の初診時と最終受診時の現在歯数と受診期間中に行なわれた同年代の歯科疾患実態調査の現在歯数と比べた結果、年代が高くなるに従い、差が大きくなる傾向が認められた。

5) 喪失歯数が最も多かった 50 代（初診年代）について、上下左右の歯の寿命が 50 年前後である第 2 小臼歯に着目して、健全歯と処置歯に分け、歯の寿命を生存分析した結果、今回の期間においては健全歯に比べ処置歯の生存率が低い傾向が認められたが、統計的に有意な差は認められなかった。

以上の結果から、長期間にわたる定期健診は、歯の寿命の延伸に貢献できる可能性が示唆された。